

食の社員研修旅行



瑞龍寺の境内で記念撮影

十一月十六日、十七日の二日間、復興支援のため富山・能登地方に行ってきました。

新高岡駅で東京支店、大阪支店の営業マンと合流しました。始めに国宝高岡山瑞龍寺に参拝して、次に高岡大仏を見学しました。お昼は富山名物の「白エビ」料理を堪能し、その後、富山港へ移動して「富岩水上ライン」で運河クルーズを楽しみました。宿泊は氷見温泉郷の旅館でした。そこでの夕食は「加能ずわい蟹」尽くしの料理で皆さん大満足でした。

二日目は、始めに道の駅「能登食祭市場」へ行き、社員の皆さんは復興の気持ちをこめ、たくさんのお土産を購入しました。次に羽咋市の宇宙科学博物館「コスモアイル羽咋」へ行き、宇宙船や月面車などを見学し、砂浜を走る千里浜なぎさドライブウェイを走り、昼食は金沢市内のステーキ店、最後に小松市にある自動車のふるさと「日本自動車博物館」で懐かしい車をたくさん見ってきました。

今回は、食にこだわった豪華な旅行でした。

豪華な蟹三味の夕食は、乾杯で始まりました。皆さんの



鍵山秀三郎さんに学ぶ

「清潔」について

乱雑にならず、汚れない仕組みをすることです。さらに、後始末をきちんとすることです。

『一日一話』鍵山秀三郎著より



ネズミ退治には
コロソブロック



ゴキブリ追放宣言

DCMホールディングス(株)

ダイキ(株)の創業者

大亀孝裕様に学ぶ

恩義を忘れない

古来日本人は、「一宿一飯の恩義」を重んじてきた。一晩泊めてもらったり、一度でも食事をさせてもらったりしたら、その恩を一生忘れることなく、必ず報いるということだ。恩を受けた相手を裏切ることなど、決してあってはならない。

恩義を貫くために、無理をしなければならぬこともあるだろう。しかし、そういうときにこそ誠意を尽くし、歯を食いしばって踏ん張る。それが、人としての姿である。

私が一九五八年に大亀商事を創業したとき、大阪の衛生陶器メーカーであるアサヒ衛陶の丹司徳蔵さんにお世話になった。丹司さんがいなければ、今の私は存在しない。まさに恩人中の恩人である。その後、七〇年代に入り、衛生陶器の国内トップメーカーである東陶機器(現・TOTO)から取引の打診があった。当社としては飛躍のチャンスである。しかし、東陶機器は同業他社との複

数取引を認めていなかったため、アサヒ衛陶との取引停止を求めてきた。

私は丹司さんへの恩義を重んじ、条件はのめないで返答した。すると東陶機器は、なんと自社のルールを変更して契約してくれた。交渉が不利になるのを承知で恩を大切にしたこと、かえって相手から信頼され、双方が発展できるみちが拓けたのである。

『素人じゃけんできること(ダイキ創業者・大亀孝裕のフィロソフィー)』

PHP研究所発行より

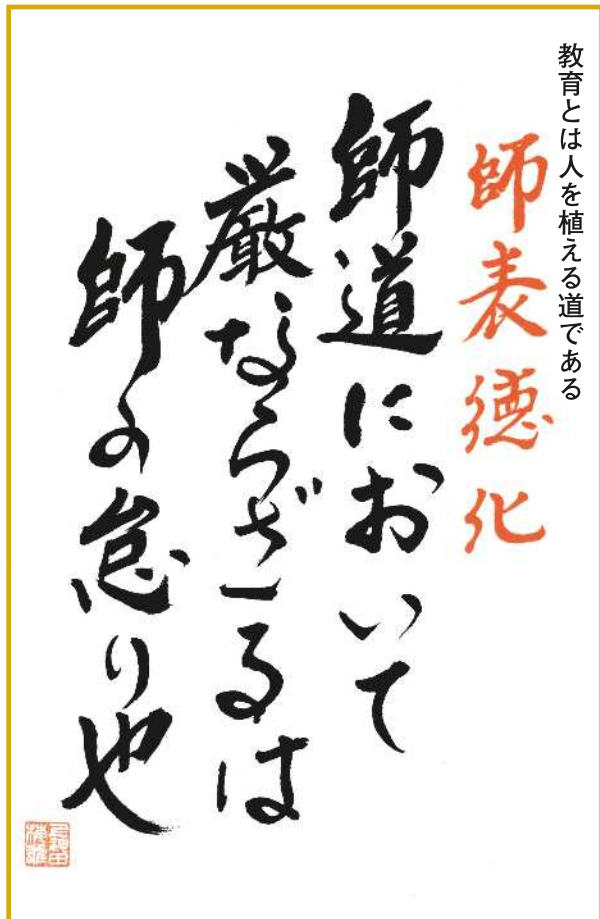


亀の石像の横に立つ大亀孝裕さん(右)と松岡浩元会長(左) (平成26年撮影)

上神田梅雄さん(新宿調理師専門学校・元校長)に学ぶ

『調理師という人生を目指す君に』 上神田梅雄著

教育とは人を植える道である



「志」と「覚悟」を伝えていく責務

これは、「教師は厳しくなければ、教師に相應あやましくない。教師としての責務を全うしていない」という教えです。

教師という仕事は、自分自身に厳しく対峙たいししなければならぬものです。そういった覚悟で取り組む教師の姿から、生徒は多くを学んでいきます。また、そうでなければ、生徒は本当の意味では、育っていきません。知識をただ伝えるだけの伝達作業なら、それほど厳しさは必要ないでしょう。

あまりにも暗記・知識偏重で進んできた学校教育の現場、「子どもの自主性・意志を尊重した、ゆとり教育」という大義の旗印の下、家庭から人としての美しい躰ていけの部分ぶぶんは消え、学校から倫理・道徳も消え、どこかへ吹き飛んでしまいました。

その結果、この国の住人は、皆が競って声高に権利ばかりを主張するとうう、みっともない風潮になって、恥も外聞も無くなってきてしまったように感じます。